

Title	訃報 : 伴先生
Author(s)	谷崎, 久志
Citation	大阪大学経済学. 68(3 - 4) P.55-P.56
Issue Date	2019-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/71473
DOI	10.18910/71473
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>



伴先生

伴金美先生は2018年12月6日にご逝去されました。享年68歳でした。伴先生は、1972年3月名古屋大学経済学部卒業、1974年3月名古屋大学大学院経済学研究科修士課程修了後、1974年4月京都大学経済研究所助手に採用され、広島大学、筑波大学を経て、1982年4月大阪大学経済学部助教授、1991年10月同教授に就任、2014年3月定年退職され、本学より名誉教授の称号を授与されました。退職後は、高知工科大学マネジメント学部に移されました。

伴先生の専門は計量経済学です。観測された経済データを用い経済理論が成立しているかどうか、経済変数間に関係が存在するかどうかを確率・統計的な手法を用いて、検証するのが計量経済学です。多くの種類の経済データがありますが、このデータを分析して背後にある意味をくみ取るということを念頭に置かれていたように思います。さらに、データを用いて、現実の経済を再現するための経済モデルを構築され、経済モデルに様々なショックを与えたときに経済がどのように反応するかを試算することで、経済のメカニズムを解明するという分析を行っていました。いわゆる、マクロ計量モデルの構築とそれに基づいた分析の先駆けの一人と言っても過言ではないと思います。伴先生が大学院に入学された1972年当時は、簡単に使える計量ソフトもまだ開発されていなくて、計量モデル分析を行うためには、コンピュータ言語（Fortran, Basic, C言語など）の知識が不可欠でした。現在と比べると、かなり数居の高い作業だったと言えます。また、伴先生は第三者が再現できるオープンな経済モデルの構築ということを常に考えておられました。晩年には、地球環境問題（特に、地球温暖化による気候変動問題）にご興味を示されていました。地球温暖化は石油・石炭・ガスを燃やすことで生じる二酸化炭素の排出量増加によるものと考えられます。現在、二酸化炭素の排出量は、先進国と発展途上国で半分ずつ排出しています。発展途上国の排出量の増加は著しいですが、削減することに強く反対しています。先進国が排出削減をしても、発展途上国が排出を続ければ、地球

温暖化問題は解決しません。もう一つ重要なことは、世代間の利害対立です。現世代が化石燃料を大量に消費すれば、その被害は次世代が負うこととなります。このような状況の経済モデルを構築し、国家間や世代間の利害を示し、先進国と発展途上国それぞれの立場の主張がどのような結果をもたらすかを客観的に明らかにしようとしていました。

また、本学経済学部・経済学研究科の情報処理機器・教室などのコンピュータ環境の整備や経済経営分野のデータ・ベースの構築・整備に長年尽力し、同所属の教員・学生の教育・研究に多大な貢献をもたらしました。学外でも、内閣府経済社会総合研究所、日本学術振興会、日本学術会議、国立環境研究所、経済産業研究所などで様々な委員または研究員をなされ、長年多岐にわたって社会的に貢献されました。

個人的には、伴先生は私が理論・計量経済学会（現・日本経済学会）の近畿大学で開催された西部部会（今は春季大会として全国大会）で学会発表した時（1987年）の討論者でした（この時、私は大学院生として神戸大学経済学研究科に所属していて、初めての学会発表でした）。今では、学生はポスターセッションで報告（パネルの前において、人が聞きに来るたびに研究内容を説明）することが慣例になっていますが、当時はポスターセッションがなく申し込めば学生でも討論者がついた通常の報告（報告者報告、討論者コメントと質問、報告者応答の順）でした。私の報告論文の評価について、伴先生は良いとも悪いともはっきり言わず、私の指導教員とその他神戸大関係者の伴先生の討論に対する評判はあまりいいものではありませんでした。これは想像の域を出ませんが、多分、伴先生は私の当時の論文をあまり評価されず、私が大学院生だったということもあり、かなり抑えてコメントされていたのではないかと想像しています。これも今や懐かしい思い出です。

最後になりますが、伴先生のご冥福をお祈り申し上げます。

2019年1月

（谷崎久志 大阪大学大学院経済学研究科教授）